

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02544

研究課題名（和文）ヘンリー・ジェームズの身体表象と中間的アイデンティティの関連の研究

研究課題名（英文）Inbetween-ness and Embodied Knowledge in the Novels of Henry James

研究代表者

竹井 智子（Takei, Tomoko）

京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授

研究者番号：50340899

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ヘンリー・ジェームズの最晩年の作品群を、中間的帰属意識と身体表象に注目しつつ分析した。テキストの精読及び計量分析に加え、現代の中間的帰属意識の研究も援用し、当時の作家の精神崩壊と回復の過程が、一連の作品にどのように反映されているかを明らかにした。主な研究成果は、研究発表4件、雑誌論文1件、共著論集1件で公表。さらに論集等での公表を進めている。また、研究分担者が中間的帰属意識を持つ当事者によるカンファレンスを開催。今後も定期的を開催し、研究代表者と共に文学研究との接続を図る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジェームズの最晩年の作品群についての先行研究は著しく少ない。しかし、本研究によって、これらが晩年の作家のアイデンティティの危機と回復、そして再肯定の過程を反映する重要な作品群であることを証明した。また、計量分析や現代的視点を取り入れることで、新たな可能性と中間的帰属意識をめぐる議論の現代性および普遍性を示した。特に、中間的帰属意識についてのカンファレンスは、現代日本社会における重要なテーマであるという点からも意義が大きい。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the Inbetween-ness (liminal identity) of Henry James that is reflected in his final texts, focusing on the embodied knowledge of the central characters. In addition to the close reading of the texts, the study conducted a quantitative analysis and research on liminal identities in modern society. It revealed how James's final texts demonstrate the shift of his identity from the negative state of nowhere-ness to the positive state of everywhere-ness. The results of this study were published in four academic conferences, one academic essay, and one book article; further publications are underway. A conference was held on liminal identities in contemporary Japanese society; this conference will be organized periodically.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ヘンリー・ジェームズ 『ファイナー・グレイン』 中間的帰属意識 liminal identity inbetween-ness

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

ヘンリー・ジェームズの最晩年の作品に関わる本研究を始めるにあたって、以下のような背景があった。

ジェームズの最晩年の作品群についての研究はあまり多くはない。特に、最後の短編小説集『ファイナー・グレイン』については、先行研究が著しく少ないと言ってよい。Adeline R. Tintner による *The Twentieth-Century World of Henry James* は 20 世紀以降のジェームズの作品を伝記的事実や社会背景をふまえて論じるもので極めて重要であるが、ジェームズの最晩年のみに焦点を当てたものではない。また、Richard A. Hocks や N. H. Reeve などの著名研究者らが最晩年の作品についての研究論文を発表しているものの、この時期の作品を網羅的かつ系統的に取り扱った研究は僅少である。このような状況のなか、ジェームズの最晩年、具体的には、ニューヨーク版の売れ行き不振が明らかになった 1908 年以降の作品についての研究を進めることは、以下の理由から意義があると考えた。

まず、ジェームズは、1904 年から翌年にかけて約 20 年ぶりに故郷アメリカを再訪し、ニューヨーク版のために自作の改訂作業を行ったため、この時期の作品群は、彼の作家としての到達点を示していると考えられるからである。さらに、ジェームズが、この時期にアイデンティティの危機を経験していることも看過できない。1908 年に発覚した選集の売れ行き不振を契機にジェームズは心身共に不調をきたし、最終的に 1910 年に精神崩壊を迎える。しかし自伝の執筆により回復し、その後は死の直前まで創作を続けた。この経緯に沿って執筆された『ファイナー・グレイン』、自伝、未完の長編小説、『象牙の塔』と『過去の感覚』は、作家のアイデンティティの危機と回復、再肯定の過程を反映していると考えられたのである。

この時期に執筆された作品における中間的帰属意識の考察がジェームズ研究に新しい見地をもたらすと思われるきっかけは、これ以前から研究代表者が進めていた研究にあった。テキストの精読を中心に、様々なパラダイムシフトを経験した 20 世紀初頭というコンテキストと照応して研究を進め、雑誌掲載論文 “Suburban Consciousness in Henry James’s ‘Mora Montravers’” (2013) や口頭発表、「Henry James, “Crapy Cornelia” に穿たれた穴」(2014)、および雑誌掲載論文「言語と身体の奇妙な融合——ヘンリー・ジェームズ自伝における南北戦争をめぐる語り」(2017) 等の成果があった。その中で、ジェームズの最晩年期のテキストにおいては、身体表象が登場人物や語り手の認識の準拠枠として機能している可能性があること、そして従来は「傍観者的」「受け身」といった消極的な言葉で表現されてきた作家の中間的帰属意識とは異なる、より積極的な特質があることを見出したのである。そこで、この 2 点の相関を中心に『ファイナー・グレイン』とその周辺のテキストの分析を行うことで、ジェームズ最晩年期の研究に資することになると考えた。

2. 研究の目的

上述のように、本研究の目的は、ジェームズの最晩年期のテキストを、認識に関する身体的表象に焦点を当てつつ精査することによって、それらに反映された作家の中間的帰属意識を研究することであった。具体的に研究の対象としたのは、『ファイナー・グレイン』所収の「ピロードの手袋」、「喪服のコーネリア」、「一巡り」、「荒涼のベンチ」および遺作となった未完の長編小説、『過去の感覚』である。これにより、それまでに研究代表者が行ってきた研究と併せて、1908 年以後の小説作品を網羅することとした。テキストの精査の補助として、計量分析の手法の導入可能性を検討することとした。さらに、ジェームズの中間的帰属意識の基盤を形成していると考えられるコスモポリタニズムの問題を新たな見地から検討するため、現代的グローバルリズムにおける (A)TCKs ([Adult] Third Culture Kids = 性格形成期に母国以外の国で過ごした人々) の研究理論を援用することとした。このように、ジェームズのテキストを学際的かつ重層的に分析し、その現代性を改めて示すことを目指した。以上を通して、最晩年期のジェームズの中間的帰属意識の揺らぎと変遷を明らかにすることを最終目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、(1) ジェームズの最晩年期のテキストの精読をとおして、認識に関する身体的表象と中間的アイデンティティの相関を分析することを主軸に、(2) テキストの計量分析および(3) (A)TCKs 論をはじめとする、現代社会における中間的アイデンティティを持つ人々の研究を援用した。以下に具体的に説明する。

(1) ジェームズ最晩年期のテキストの精査

ニューヨーク版出版後の作品群を、認識に関する身体的表象に焦点を当てつつ精読し、作家の中間的帰属意識がどのようにそれらのテキストに読み取りうるかを考察した。研究期間に扱った作品は、既述のように「ピロードの手袋」、「喪服のコーネリア」、「一巡り」、「荒涼のベンチ」、「過去の感覚」である。

認識における身体的表象としては、次の 3 点に着目した。ジェームズ作品の根底にあるコスモポリタニズムに関わる概念として、「登場人物による移動や身体の動き」を検討した。加え

て、登場人物による「視覚と聴覚による認識の転換」を「色」に着目して分析した。特定の文化に属しない「傍観者」としてのジェームズ自身の経験からくる、国家や文化の枠組みではなく「身体」という枠組みを通じた認識過程がテキストに反映されていると考えたからである。さらに、距離的移動のみならず、時間的な移動と「概念や触知不可能なものを具体的で触知可能なものへと転化」する語りに注目した。これは、ニューヨーク版出版のために自作の改訂作業を経験したジェームズが、空間のみならず時間的にも「あり得たかもしれないプロットや生き方」を省察したことを、テキストが反映していると考えられたためである。

テキストの精査には、伝記と自伝および手紙から得られる伝記的背景とともに、テクノロジーの進化といった社会背景との相関も考慮した。

また、研究期間中に行った作品研究は、研究代表者がそれまでに行っていたジェームズ最晩年期の他作品の研究と併せて再検討した。

(2) テキストの計量分析

ジェームズのテキスト研究を補足する目的で、計量分析を取り入れた。ジェームズの晩年のテキストは難解であるといわれる。また、ティントナーが指摘しているように、1900年代のジェームズ作品にはモダニズム的要素を見出し得るが、その特徴は本研究で対象とする最晩年の作品群において特に顕著であると言える。このような最晩年作の特徴を計量的に分析できるかを試みた。具体的には、研究期間全体をとおして、1890年代後半に書かれた中短編小説（「檻の中」、「ねじの回転」、「メイジーの知ったこと」、「ポイントンの蒐集品」）の初期テキストとニューヨーク版（改訂版）テキストの比較をdiffソフトを用いて行い、分析に適したデータ表を作成した。

最終年度にはリーダビリティの研究を行った。対象テキストは、『ファイナー・グレイン』所収のテキストと、1900年に途中まで執筆したものの中断し、1914年に再開した『過去の感覚』である。

以上により、1908年前後およびそれ以降に書かれたテキストの特徴を、それ以前（特に円熟期直前の1890年代後半）のテキストとの比較において抽出することを試みた。

(3) 現代社会における中間的アイデンティティ研究の援用

ジェームズをめぐるのは、これまで国内外であまたの研究がなされてきた。その中で繰り返し指摘されてきた、「国際テーマ」や作家と登場人物の「曖昧なセクシュアリティ」、「傍観的な語り手」などの特徴の多くが、中間的なアイデンティティこそが彼の基本的特質であることを示唆している。ジェームズ作品の特徴として挙げられる中間的性質は、彼のコスモポリタンとしての性質と無関係ではないと考えられる。それが最晩年に至るまで貫かれていたであろうことは、『ファイナー・グレイン』所収作のうち3作品と遺作となった2つの長編においてexpatriate(国外への脱出者)とrepatriate(帰国者)が扱われていることからもうかがえる。上記(1)でも触れたように、ジェームズのテキストにおける身体的な表象の根底には、物理的・地理的に移動することによって培われた、国家という枠組みを持たず、個人という生身の準拠枠を頼るしかないコスモポリタン精神があると考えられる。そのため、中間的な領域への帰属意識が包摂する性質についての理論的補強のため、研究初年度には、研究分担者と共に、(A)TCKs(性格形成期に海外で過ごした人々)のアイデンティティの感覚についての研究会を行った。さらに、2年目には性的マイノリティを含む、中間的帰属意識(liminal identity)を持つ様々な立場の当事者研究へと範囲を広げ、現代的知見を取り入れることを試みた。3年目となる2019年10月には、中間的帰属意識を抱く人々の当事者研究の一つとして、カンファレンス“Living on the Edge: The Joys and Challenges of Being Different in Japan”を、研究分担者が主催した。

4. 研究成果

上記の3つのアプローチを用いて当該研究を進めた結果、研究代表者が行ったジェームズの最晩年のテキスト研究については以下のような成果を得た。

雑誌掲載論文、“Pain and the Possibility of Spaces Between: Henry James's Last Tale”(2018)においては、『ファイナー・グレイン』に収録されている「一巡り」を詳細に分析した。主人公が抱える「痛み」が心理的な痛みから身体的痛みに転換することに着目し、自伝の記述との比較を通して、それが作者ジェームズの中間的アイデンティティに由来することを指摘した。また、この転換プロセスと、さらにそれを言語化し昇華しようと試みるプロセスが、作家のその後の回復過程（自伝の執筆によって精神危機を脱したという経緯）を暗示していることを論じた。これによって、これまでは救いのない作品と捉えられてきた本作の新たな解釈可能性、すなわち、作者の中間的なアイデンティティが内包する積極的側面を見出した。

2018年5月に開催された日本英文学会で行った発表、「ヘンリー・ジェームズ、『ファイナー・グレイン』の色と場所」では、「喪服のコーネリア」、「ピロードの手袋」、「荒涼のベンチ」各テキストにおける「黒」の用いられ方に注目した。各作品の舞台であるニューヨーク、パリ、イギリス南部の海岸リゾート地とそれぞれの黒との結びつきや、3作品に通底する黒の役割を検討した。さらに、ジェームズ研究ではしばしば言及される「視覚」のみならず「聴覚」を通

しての認識の表象にも論及した。ジェームズの作品における色をめぐる研究や聴覚についての議論は多くはないが、本発表では、これらがジェームズ研究のために有効な視点を提供していることを示した。以上を踏まえ、黒とその対称色が、価値観が対立する 20 世紀初頭の状況に対するジェームズの絶望を反映していると同時に、相互理解なき共存という他者との新しい関係性を認め、価値観間の領域にかすかな可能性を見いだそうとする作者の積極性をも示唆していることを指摘した。当発表内容のうち、「ピロードの手袋」をめぐる議論は、その後論文として書き直し、現在、共著論集の中での発表を準備している（2020 年末出版予定）。

2018 年 10 月に開催された日本アメリカ文学会で行った発表、「読むことと書くことと *The Sense of the Past*」では、『過去の感覚』のテキストが、いかに批評家にとっての読む行為・作家にとっての読む行為・読者にとっての読む行為を描いているかを論じた。読み書きという永遠に終わらない螺旋的な円環運動を捕捉することで、ジェームズが時代を超えて読み継がれるテキストの中間的性質を前景化し、作家の中間的アイデンティティを肯定しようとしたことを指摘した。当発表の内容は、論文として共著論集において発表した。

2019 年 8 月に開催されたヘンリー・ジェームズ研究会での発表、「「どこにも」から「どこでも」へ ニューヨーク版後のジェームズの作品について」においては、当該研究開始以前から行ってきた研究と併せて、ニューヨーク版後のジェームズの全ての小説作品をとおして彼の中間的な帰属意識の変遷を捉えた。『ファイナー・グレイン』所収 5 作品はいずれも、帰属の不安とコスモポリタンの自己信頼の間を不安定に行き来する作家の精神状態を反映している。自伝『息子と弟の覚書』における南北戦争の記述には、ジェームズが様々な二項対立を越境する作家本来の中間的アイデンティティを肯定する過程が確認できる。そして未完の 2 遺作からは、無限に広がる関係性の網を作り上げ、存在・非存在を超えてテキストの可能性を試そうとするジェームズの意欲が読み取れる。このように、「どこにも」と「どこでも」の葛藤から、コスモポリタンの自己信頼に裏打ちされた偏在性とも言うべき「どこでも」感への推移を、ジェームズの晩年の作品群に読みとった。

さらに、ジェームズ最晩年期の作品群についての研究は、学位論文 *From Nowhere to Everywhere: The Inbetweenness in Henry James's Works after the New York Edition* にまとめた。なお、この論文については、2021 年にウェブ公開予定である。

テキストの計量分析的研究の成果としては、晩年期の文体の特徴抽出のために、1890 年代後半に書かれた中短編小説、「檻の中」、「ねじの回転」、「メイジの知ったこと」、「ポイントンの蒐集品」の初期版テキストとニューヨーク版テキストの diff 比較表を作成した。さらに、『ファイナー・グレイン』所収作と『過去の感覚』のリーダービリティ比較により、『過去の感覚』のテキストのうち、初期(1900 年)に執筆した部分と最晩年(1914 年)に執筆した部分の違いを抽出した。この結果に、diff 比較による特徴分析を加えて分析を進め、現在は論文の執筆を進めている。

一方、研究分担者が中心となって行った、現代における中間的帰属意識についての当事者研究に関する成果は次の通りである。研究代表者と研究分担者が定期的で開催した(A)TCKs 研究についての研究会の成果は、上述の論文・書籍や口頭発表、特にその根幹となる「消極的中間性」と「積極的中間性」の議論に反映されている。さらに、研究分担者はより包括的な中間的帰属意識(liminal identity)の調査・研究へと射程を広げ、最終年度には、現代社会に生きる様々な形での「中間的帰属意識」について当事者たちによるカンファレンス“Living on the Edge: The Joys and Challenges of Being Different in Japan”を主催した。カンファレンスは 24 の口頭発表と 1 つのパネルディスカッションから成り、120 人が参加した。性自認や在日外国人の問題などについて、現代日本社会において曖昧な帰属意識を抱く人々による議論が交わされ、中間的帰属意識をめぐる議論の現代性や普遍性が見直された。さらには、日本で活躍する外国人詩人による「距離感」や「他と異なること」と創作との関係についての発表がなされるなど、文学研究との接点も見出した。カンファレンス参加者からの要望に応え、今後も定期的な開催を続けることとした。次回は 2021 年 5 月の開催を予定しており、文学研究での発表も検討している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Takei, Tomoko	4. 巻 17
2. 論文標題 Pain and the Possibility of Spaces Between: Henry James's Last Tale	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Journal of the American Literature Society in Japan	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Grote, Yoshi Joanna	4. 巻 記載なし
2. 論文標題 Living in Liminality: LGBTQIA+ Identities in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The 2018 PanSIG Journal	6. 最初と最後の頁 99-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Grote, Yoshi Joanna	4. 巻 52
2. 論文標題 Building Intercultural Connections in the Gender Studies Classroom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Acta Humanistica Et Scientifica Universitatis Sangio Kyotiensis. Humanities Series 京都産業大学 論集	6. 最初と最後の頁 301-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹井 智子
2. 発表標題 読むことと書くこととThe Sense of the Past
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第57回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹井 智子
2. 発表標題 ヘンリー・ジェイムズ、『ファイナー・グレイン』の色と場所
3. 学会等名 日本英文学会第90回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Grote, Yoshi Joanna
2. 発表標題 Living in Liminality: LGBTQIA+ Identity in Japan
3. 学会等名 PanSIG 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹井智子
2. 発表標題 Money Money Money 作家たちの財政事情, ヘンリー・ジェイムズの財政事情と作品
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹井智子
2. 発表標題 ヘンリー・ジェイムズと中間的帰属意識(“inbetween-ness”)の問題: “A Round of Visits”を中心に
3. 学会等名 第7回ヘンリー・ジェイムズ研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Grote, Yoshi Joanna
2. 発表標題 Where Culture Meets Gender: The Challenges & Rewards of Teaching Gender Studies in a Multicultural Classroom
3. 学会等名 Conference of Constructive Communication Across Gender & Cultures
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Grote, Yoshi Joanna
2. 発表標題 Steps Toward Transgender Policy
3. 学会等名 JALT 2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹井智子
2. 発表標題 「どこにも」から「どこでも」へ ニューヨーク版後のジェイムズの作品について
3. 学会等名 第9回ヘンリー・ジェイムズ研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 竹井智子 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 339
3. 書名 精読という迷宮 アメリカ文学のメタリーディング	

1. 著者名 竹井智子 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 -
3. 書名 それぞれの方法 アメリカ文学研究最前線(仮題)	

1. 著者名 Grote, Yoshi Joanna 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Candlin and Mynard	5. 総ページ数 -
3. 書名 Foreign Female English Teachers in Japanese Higher Education: Narratives from our Quarter.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔学位論文〕Takei, Tomoko. From Nowhere to Everywhere: The Inbetweenness in Henry James's Works after the New York Edition (2021年ウェブ公開予定)
〔カンファレンス主催〕Grote, Yoshi Joanna. "Living on the Edge: The Joys and Challenges of Being Different in Japan" (2019年)

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	グローテ ジョアナ (Grote Yoshi Joanna) (60633295)	京都産業大学・外国語学部・講師 (34304)	